修羅の路

瑕傷々

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿です。（ハーメルンは）

ｐｉｘｉｖで上げようと思っていたクロスオーバー作品です。（パスワード忘れて投稿できなくなっちゃった）

川原正敏先生の「修羅の刻」とお馴染みソーシャルゲーム「Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　Ｏｒｄｅｒ」を掛け混ぜてみました。

１．５部のネタバレを多量含むと思います。今更感。

批評感想何でもどうぞ。

ガチャ報告は許さんぞ。

目次

「武蔵」を名乗る者
序幕 ―― 1
一幕一場「プルガトリオ（壱）」 ―― 4
一幕二場「プルガトリオ（弐）」 ―― 7

「武蔵」を名乗る者

序幕

ーーー寛永十六年　某月某日　未の刻

周りに広がるのは四角が延々続いた田園風景。

ある男が街道沿いの土手坂、若木の影を顔に乗せていた。

外見はぼろになった胴着に腰には小太刀が一口。体格は幅広な胴着からでも分かる程度には整っている。…が、いかんせん纏う空気が緩いモノであるが故にチグハグさが際立っていた。

故に、見る者一人一人によって男の印象は様々に形を変えるだろう。実際、寝床(土手)に来るまでにすれ違った者達から見た男の印象は風の行くままに生きる旅芸人、国荒れによって他国に彷徨う浪人、他の惣村などに雇われている用心棒などであった。

士農工商の区分けがハッキリとし始める管理時代の黎明期。…それでも男の内情を少しでも捉えられた者はいなかった。

「何だってんだ、ココは　腹減ったな・・」

時折鳴る腹を寂しそうに撫でながら細々と声を漏らす件の不明男。

足を大に広げながら腕を枕にし、片眼開いたその中には痛い青空に風に泳ぐ薄白の雲を映している。

まるで空の海に浮かんだ舟の如く。男はする事無しにただただ其れ等を見つめ続ける。

遠い鳥の声、低い蛙の鳴き、通り抜ける山風の音。

在りのままの自然を感じながら暫く動きの一切を止めていた男であったが、自身の(鬼の巣)里に置いてきた身重の嫁や父母を想い、愁いの息を吐き出す。

吐息は山風の合間に混ざって流れていったが、その途中にあるナニカに当たり四散する。

男は気配を感じ取り宙(ソラ)に眩んだ目を瞬かせた。

いつの間にか白い雲々はその視界から消え、黒々とした澱んだ黒雲が空を包み覆い被さっている事に気付く。

「おい・・・」
男は身体を起こし軽く肩を回す。
腕から肩、肩から腰、腰から足までの弛みに活が入ると、同時に今迄のゆったりと凪いでいた暢気は澄んだ闘気へと変化する。
男の日々の鍛錬の成果故なのかその準備は一息で済み、その身体は即座に戦闘態勢に入る。それがあたかも常の様に。
そして次の瞬間。
視界外から襲ってきた半透明の三体の餓者髑髏を、座り見ぬままその両手に一体ずつ掴んで即座に地に叩き付け、叩いた反動で飛び起きれば一直線に伸び切った蹴りで残る一体も跡形も無く消し飛ばす。
「全く・・うかうか昼寝もできやしないのか」
男はそのまま何間も落ち土手の底へ着地すると、ユラリと身体を起こして溜息を吐く。
背後の街道から湧いているのは人数人分の質量を持つ人外の武者鎧。凄まじい速度で数を増していくその異形は兜の内にて音にならない殺気を漏らしながら、人間(餌)と認識した男の元へ徐々に近付いていく。
浮遊し、先行してくる髑髏の霊体をいとも容易く殴り抜く事で四散させながら男は思考を重ねる。
(妙な奴等がわんさかいやがるな　・・・血ぃダラダラ垂らしながら全くだらしがねぇ　オレだって口許位は拭くぞ)
自身の今迄の価値観の外側に存在する怪異達の異常性には触れず、否・・気にも留めていないのかゆっくりと足を進めていく男。
赤黒い血が滴り蠢き嗤う武者鎧と冷たく黄泉へ誘い嗤う餓者髑髏の群は、獲物を逃さぬ狼の様に男の周りを埋めていき、相対的にその距離を詰めていく。
ぐるり。ぐるり。
死が近付いている筈の男は不敵に口角を上げる。
途端。我先にと刃が、爪が、その牙が襲い掛かる。
「誰が何かはしらねぇが・・喧嘩してぇなら・・」
拾間。片目が薄く開き男の殺意が果て無しに増し。

伍間。怪異達は未知の怖気に対抗し声を上げる。
参間。十、二十が同時に向かうその中心にて。
「死ぬ気で来いよ　化生共」
零間。ーーー修羅の片鱗がその身を見せる。

一幕一場「プルガトリオ（壱）」

ーーー寛永十六年　某月某日　朱の刻

それは前触れも無く唐突に。

不道理の月夜の始まった。

「…可笑し、可笑しいぃ⁉？　何しよる糞坊主うー」

半身を切り取られた男を抱き、女は狂う。死ぬ。

「逃げぃ！　子ら、早う！殃禍（おうか）が来よるっ！早うー」

多量の血を浴びながら老人は声高に叫ぶ。死ぬ。

「ちぃぃ…！　化物め⁉？　近よるなぁ！こ…ー」

浪人らしき帯刀者は獲物を振り回し怯える。死ぬ。

死ぬ。死ぬ。死ぬ。

逃げる者は追い抜かれ、臓腑を抉り刺し殺された。

挑む者はその差に絶望し、横鎌に撫で殺された。

諦めた者は嘲笑と共に、引き刃で斬り殺された。

男も女も赤子も老人も関係無く。その破戒僧は人型であるならば目に付く者を全て、丁寧に丁寧に手折っていく。

「ハ、ハハッ！ハハハハハッ！悲哀を唄え！血泡を纏い叫べよ！民草共ッ……どうせの事、貴様等はあの武蔵（女）への前座故なぁっ…！」

「きさんっ！　何言ってるか人殺しがぁっ！ー」

「死ね！死ねぇっ！　俺の子をよくもっー」

潜んでいた村の男達が、微かな抵抗として振り被った鎌はその全ての柄が二断され、返しの刃で地面には血華が咲く。

殺す。殺す。殺す。

家屋を開き、火を付け、虫を燻す様に炙り出す。

人の肉脂にも火は回り、其処は人界の豪炎地獄。

その光景を見ながら憎悪と殺意に僧は吠え笑う。

総ての道徳を溝に晒しながらその在り方を良しとし、その身を狂わせる殺人衝動に身を委ねながら次の指針を聡明な脳髄の中身（宝蔵院胤舜のアビリティ）から引き出す。

（かるであとやらから来た妙な服を着ていた女を殺す、其奴が抱いて

いたおぬいと田助を殺す。）
（それにあの女、新免武蔵守を殺す。）
（初めの村を潰した時。奴等、姿を見せなんだ。それは此処に来る時も然り。）
（隠れたとしてもあの童等を優先するのであれば他からの助けは必須。平地が続く此の村でない、とするならば…。）
（残るはあの山村。それかその付近であろうな。）
（ならばこの様な雑事は疾く終わらせ、殺す。違いの無い様、念入りに全員を晒してやろう。）
「だが、此れはこれで好いモノだなァ！　ランサー・プルガトリオたるこの身、技量（わざ）は満ちなれど殺しは未だ幼く足りぬ故」
「たすっ、たすけてっ！　かあさまっ！　じいー」
炙られ出てきた幼子の首を一息で斬り飛ばし、掃討に移行した僧は血肉の村を駆ける。
人を探し、人を見つけ、人を殺す。
刺し抜く感触。血を浴びる光景。落ちる肉塊の音。
その死に様を武蔵達に投射すれば一層熱（いき）り、手の中で回した愛槍は木陰に息を殺し隠れていた六人の家族を瞬く間に撫で斬りにする。
ーーー朱月は天上に。村の夜明けは近い。

◇

その後。
半刻も掛からずに絶滅した二つ目の村を後にする。
残ったのは燃え滓が弾ける音。肉を貪る犬達の遠吠え。そして、大量の血などの濃密な死臭。
僧は身体に付いた淀んだ血潮と脂を振り落とし、蜘蛛の巣状で砕かれた憑き大武者やら屍肉喰らいの獣の死骸やらを横目に駆け出そうとしていた。
唯、頭に残っていたのは殺戮の光景。
求め降ろすのは一切合切の人種の死。
僧が見つめ、目指すその先に。
新たな地獄が産まれようとしていた。

ーーー本来。
本来であるならば、此の時点でプルガトリオが行う武蔵への追撃により山中にある村の死が確定事項となる筈だった。
あの男がその世界に迷い込まず、下総国に立ち寄らず、更には昼寝をしていた土手にて無双の大立ち回りをする事が無かったのなら。
『回避不可』であった被害はそのままであった。
が、全ての因果を引き寄せた片目の男は現在(今)を変え、過去に自身が体験した舞台を再現する。
悪鬼達の欲や情念が逆巻いた『英霊剣豪七番勝負』と云う舟に乗り、一心に滝壺を目指していくのだ。
「何をそんなに急いでやがる　怪僧」
…故に、此処に運命は紡がれる。
ーーー最後に這い出るのは、誰か。

一幕二場「プルガトリオ（弐）」

ーーー寛永十六年　某月某日　酉の刻

その声が聞こえた瞬間。

怪僧と呼ばれた者は即座に男の居る土手下へと駿足を駆け至り、その身に刻まれた五芒星陣の衝動のまま不可避の槍撃を見舞う。

それは煉獄へと堕落した『宝蔵院胤舜』にとっては素直な、故に極悪の闘意と殺意が込められた一突きであった。

「なるほど　道理で臭い奴等が居る訳だな」

だが、『とにもかくにも外れあらまし』と謳われた必至のそれは、三枝の根元である口金を握る男の片手に止められた。

僧は心に僅かな喫驚を浮かべたが、その言葉に返す事無く掴まれた柄を小手内に巻き引き、男の腕ごと横の鎌で削ぎ落とそうとする。

回転が始まる寸前に男は外に腕を逃すと、その腕を地面に落とし跳ねる蜘蛛の様に僧の殺傷範囲から逃れる。

「……チィッ！」

「・・・は」

数秒の内に終わった一連の接触の後には十文字槍を後ろに引き不快そうに佇む僧と、始めの飄々とした態勢を崩さない男に別れた。

男が動かないのは様子見や仕切り直しが主であったが、今も尚、殺意と憎悪に囚われて居る僧が動かない理由は違かった。

男が逃れる寸前に放った脚蹴り、『先の先』の技能（スキル）すら反応しきれていない跳ね回る二蹴が僧が払った先手に打ち込まれていたのだ。

朱き月光が二人に注ぎ、殺意が満ちていく。

「……不有（有り得ず）ッ　よもや武蔵（あの女）の他にも未だ我が槍の前から逃げ切り、尚且つ反撃まで転じるとはなぁ！」

「面妖だな・・・まったく」

双方は初動にて互いの力量を感じ取り、口を動かし間合いを取り合いながらも自身の能力を天秤に掛けていた。

（あの宙で曲った回し蹴り…我が眼を超えたのは異様だったが問題は無い　敵が人であるならこの身、この不倒無敵の身体に敵う筈も無し

疾く殺し倒す。そして武蔵を殺す　疾く、疾クゥ！）
僧は侵された思考で自身の脅威では無いと感じ、
（あれはやべえな・・・　『旋（つむじ）』の響きが甘いか・あの野郎も化生の類か？　未だココの右も左も分からねえって云うのに・・　面倒だな）
男は神秘を知らぬ身で僧の異様さを感じ取った。
「オオオオッ！」
「・・・！」
次に動いたのもやはり僧。人とサーヴァントの間に横たわる敏捷な差の暴力。それを見せつける様に槍を払い、男を両脚と腰を両断せしめようとする。
だが一度は見た槍の間合いにその動き。男は自身の目付にて其れを見極め、低めから放たれた高速の鎌を地を蹴り飛び上がる事で避けようとする…が。
「逃げるナァ…！」
避けるであろうと予測していた僧は瞬時に持ち手を柄に滑らせ引き戻し、小手内の妙技にて軌道を変え、男の逃げ道を無くす。
通り過ぎた筈の槍が曲がった様に襲ってくる。
その技に男は眼を少し見開き、それでも反射的に空いている双手を穂の側面に抑え叩き、手を多少傷付けながらも1秒後の死を免れる。
サーヴァントの筋力故に男は二間余り浮かび上がると、そのまま僧の背後に着地。直ぐ様近付き自身の間合いに入れようと走り出す。
僧は振り返りながらも後手を動かし、石突の速射を男への応対に向かわせる。
常人であるならば一撃で半身が消し飛び、肉の山が出来る其れを男は拍子を合わせ叩き落とす事で対処する。
漸（ようや）く自身の間合いに僧を入れ込んだ男は離される事を良しとせず、引きながら突き薙ぎ斬る僧の槍を叩き避け抑える事で接近戦に持ち込む。
僧に向かうは妙な軌道から穿たれる変幻の拳、次瞬には極められる関節、それから続け様に届く折りの追撃。
一方、肉体と技（スペック）の差で押し込めると判断した僧。その思惑は薙ぎ払

われる暴威になり男の身体には次々に傷が付けられていく。
男が喰らうは自身の倍以上に降りかかってくる迅き絶死の鎌、避ければ薙ぎが、そして合間に挟まれるは突きの猛攻。
ーーー音が止む闘いの刹那。
男は槍の柄を掴み動かず。
僧は蹴りを受け止め動かず。
辺り一面が抉り掘り返され、見る影も無い中。
未だ名を交わさぬ二人は睨み合いながら語る。
「何故！何故！何故だ!!？　人なんぞに何故!?？　此の身、此の技、此の槍であるなら一撃で仕留められる筈だァッ！」
其れは、言葉となって僧の口から漏れ出る。
其れは、本来なら万が一にも出てこない精神思考。
「それはこちらの言葉だな　おい」
其れは、戦いでは無音を好む男には珍しい一言。
其れは、久しく感じてこなかった不可能への入口。
煉獄では無い彼ならば、一切鏖殺の業を背負っていない彼ならば、能力（スキル）を駆使しその防御術を十全に発揮させて優位に立てていた。
少なくとも『互いが千日手』になると云った状況は起こり得なかったであろう。
だが此処に居るのは『宝蔵院胤舜』の骨身を喰み、骸に巣食った『英霊剣豪』。武芸の道義も術理も僧には唯引き出し放つだけの道具と化している。
逆に並のサーヴァントであれば、不可解な業を持たず唯の力を振るう者であれば男の陸奥圓明流（最強の技）に屈していただろう。
１０度戦い１０度勝ち、１００度戦い１００度勝つ。
人界の限界に挑んだソレは遥か未来に於ける『教会の聖法技術』、『退魔の殺害技巧』にも並びうる。
だが其処に居たのは煌びやかな伝説や輝かしい経歴で英雄へ至った者では無かった。唯々技を鍛え、身を鍛え、数多全てを鍛え抜き英雄に至った同類の化物（けもの）。加えて幾ら叩き砕き切り裂いても倒れぬ不死の身体へ変生したのだから悪夢と云う他無い。

故に届かない。阻まれ打つ道義の無い刃線、誘われ放つ術理の無い動作。それでは男には、その強靭な身体に深く刻まれた５００年を超える不敗の歴史には届かない。

故に届かない。腕を叩き折り、足を踏み抜き、身体の起点や急所を幾ら狙おうとも。それだけは僧には、双無しの槍捌きと一切鏖殺の業を背負った不滅の概念には届かない。

斜め上から男を追従する様に強襲を掛ける穂先。

同時に後ろに力抜きで倒れこむ事で避ける男。

互いの距離が離れた途端に僧は槍を下から搗ち上げ、男は反応する前に飛び起きて僧の肩を打つ。

刃先の行方は変わり、其れを男は足で落とし再び距離が縮まる。

次の瞬間には僧の低めから打ち込む三連突。

闘いの流れは澱み始め、その動きは更に激を増す。

ーーー勝負の音は未だ止まない。